もし安土が『本物』なら

県政

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「俺は星間国家の悪徳領主！」でトンデモ剣術「一閃流」を主人公リアム・セラ・バンフィールドに教える剣の師匠にて、剣神とも呼ばれる事になる着物を着た浪人風の男、安土。

だが、その正体は、剣を使った大道芸で金を稼ぐ香具師であった。

本人は少し武術を齧った程度の、そこらのチンピラに負けてしまうほどの詐欺師である。

だが、その安土がもし『本物』だったら…？

目次

プロローグ ―― 1
安土 ―― 6
一閃流 ―― 13

プロローグ

俺【リアム・セラ・バンフィールド】は転生者だ。
前世、俺は一般的に見れば善良で真面目な人間だった。
妻がいて娘がいる。平凡だが確かに幸福な家庭を築き上げていた。
だが、俺の人生は狂った。
妻とは離婚し、身に覚えのない多額な借金を背負った。
妻――あの糞女は浮気していた。
浮気相手の男と結託し俺を騙し、借金を背負わせたのだ。
離婚してからも養育費を払っていたが娘も俺の実子ではなかった。
職場では、上司に横領の罪も被せられて会社をクビになった。
ボロいアパートの一室で生活し、バイトでどうにか食いつないで、借金取りに脅える日々。
そんな生活で俺は体を壊し、誰にも看取られる事もなく死んだのだった。
だが、そんな俺にも救いの手があった。
案内人――黒いシルクハットに黒いスーツを着用した少し胡散臭い超常的存在だ。

俺を憐れみ、第二の人生を与えてくれた恩人である。
そして転生させてくれたのは、剣と魔法のファンタジー世界ではなく少し不思議な世界だ。
人々は宇宙へと進出し、宇宙戦艦や人型兵器が存在する世界だ。
その世界で俺は星間国家の一つ、アルグランド帝国という国家に所属し、惑星一つを領地に持つ伯爵家に生まれた――勝ち組だ。
そして俺自身はその惑星の支配者ーーバンフィールド伯爵だ。
俺の前世は搾取される側だった。
死ぬ間際に俺は悟ったのだ。
間違っていたのは世の中ではなく、自分自身だと。
だから、第二の人生は自分のために――そして、どこまでも欲望を満たすために生きると決めた。
そう…俺は悪徳領主になる!!
その第一歩として俺は力を求めた。
前世、俺は単純な暴力に怯えていた。
借金の取り立てに来る厳つい男たちが怖かった。
暴力など無意味と思っていたが、あのような状況になると力は必要だと思った。

他者を踏みつけるために――俺は強さが欲しい。
他者を恐れないだけの力が欲しい。
暴力が欲しいのだ。
そのために強くなりたかった。
この星間国家では個人の力など意味がないと言われているが、それでもだ。
全ては奪われないために。
全てを奪うために――力が欲しかった。

◇

黒い空間に案内人ーーリアムの恩人がいた。
旅行鞄に腰掛け、映像を見ながらニヤニヤしていた。
転生した彼――リアムは七歳になっており、何やら人形ー天城と話をしていた。
クツクツと案内人が笑っていた。
映像の中、リアムは力が欲しいと言っていた。
前世で暴力に怯えた人間が、来世で力を望む――案内人は嬉しくてたまらない。
「奪われないために力が欲しい、ですか。何とも凡人ですね。だが、それがいい！」

案内人は良い存在ではなかった。
悪意の塊と言ってもいい。
そもそも、リアムが前世で不幸になったのはこの男のせいだった
幸せそうな善良な人間が、どれだけ転ぶか見てみたかった――たったそれだけの理由で己の力を使い前世のリアムを不幸にした。
そして今度は転生させてから、上げて落とすことで更なる絶望を与えようとしていた。

案内人が手を伸ばして映像に触れる。
体から黒い煙が発生し、映像に染み込んでいく。
「素晴らしい逸材を用意して差し上げますよ。アフターサービスの充実は私のモットーですからね！」
案内人はリアムの師となる男を探し、その者と無理矢理に縁を繋げる事ができる。
それこそ、詐欺師や香具師――指導を受けても強くなれない者に。
こうすれば、後はどうやってもその男がリアムの武芸の師となる。
「さて、どんな男を師範に――おやぁ？」
案内人が見つけた男は、あばら屋のような家に住み惰眠を貪っている、着物を着た浪

人風の男だ。
周囲の評判は、だらしない、詐欺師、香具師など――。
「いいですねぇこの男、評判が最悪です。どうせ大道芸などで食い繋いでいるタイプでしょう。」
案内人はこの男に決めたようだ――　詳しく調べもせずに。
「楽しんでくださいね、リアムさん。いずれ破滅するその時には、必ず迎えに行きますよ」
口元しか見えない案内人は、三日月のような口でリアムを見ているのだった。

◇

「んぁ？なんだぁ？今の」
あばら屋のような家で住む男――　名を安士。
安士は妙な気配を感じて眠りから覚めるのだった。

安士

星間国家アルグランド帝国の、とある惑星
1人の男が人を訪ねに、とあるあばら屋に向かっていた。
男は武芸の師範だった。
男は、とある貴族の子息に剣を教えるという依頼を受けたが、その貴族家は『あの』バンフィールド伯爵家だった。
バンフィールド伯爵家といえば、周辺の惑星でも有名な田舎領地である。
全く発展しておらず借金だらけ、おまけに今の領主は１０歳にもなってない子供らしい。
そして剣を教えるというのもその領主様だ。
しっかり金が支払われるかもわからず、気に入らなければどんな目に会うかもわからない。
だが、安易に断る事もできない。
力がない貴族とはいえ、貴族は貴族。
断ればどうなるか。

考えた男は「借り」がある者に依頼を頼もうと考え、その者が住むあばら屋に向かっていた。
（少々心苦しいが…まあ、あの人なら何かあっても大丈夫だろう。）
「先生――！安士先生！」
あばら屋の建て付けが悪いドアを叩きながら、ここに住む住人を呼ぶ男。
その住人の名は――安士。男が訪ねた『借り』がある人物だった。

◇

「んで？なんだよ」
あばら屋の中、その住人である安士が畳の上で寝転びながら言った。
それに対し、このあばら屋に訪れた男は安士にジト目を向けながらも答えた。
「先生、私の代わりに貴族様からの依頼を受けてくれませんか？」
「はぁ？貴族ぅ？なんだって俺にそんな依頼持ってくんだよ。お前がやれよ」
安士は鼻をほじりながら答え、指を弾いて男に何かを飛ばした。
その飛ばされた何かを体を傾けることで躱した男は、顔面をピクピクさせながらも答える。

「それがですね！あのバンフィールド伯爵家からの依頼で、まだ子どもの伯爵に剣を教えるという依頼でしてッ！」
　だいぶ怒り心頭のようである。
「あーあの鼻くそみたいな家ね。やだやだめんどくせぇ、そもそも何で俺にそんな話持ってきたの？馬鹿なの？」
　男は、「鼻くそなのはアンタだ」と思いながらも頭を下げる。
「そこを何とか！先生なら何があっても大丈夫でしょうし！何より暇ですし！」
　ひどい言いようである。
「ばっか！俺は暇を潰すのに忙しいんだよ。他当たれ」
「暇じゃないですか！」
「ああそうだ、暇だよ。てか、あれだろ？ようはその貴族の坊ちゃんを弟子にするって事だろ？嫌だね」
　男はそれを聞き、溜め息を吐きつつも、己の切り札を切ることにした。
「はぁ…仕方ないですね。」
　安士は男を追い払うようにシッシッと手をふった。
「おう、わかったか？わかったら帰れ」
「借金」

「ひょ？」
「借金チャラ」
「マ？」

◇

「しっかしお前も強情だねぇ、まさか借金チャラで報酬も俺が全額もらっていいとか。そこまで嫌か？」
「えぇ、嫌ですね。そもそも報酬もちゃんと貰えるか怪しいですし」
結局、安士は男からの依頼を受けることに決めた。
借金チャラで。
「まあ、他でやってるようなお手本剣術でも教えてテキトーにやりゃいいか」
そう答える安士に男は何か言いたげだった。
「なんだよ、貴族の坊ちゃんならそれで十分だろ？一年くらいで免許皆伝！とかいっときゃいいんだよ。」
「先生は…」

「ん？」
「先生は今のままで本当にいいと思っているんですか？」
　安士は長い、長い溜め息を吐きつつ答える。
「はぁ～～～、そんなこと言われてもよ、もうやる事もないし他にやりたい事もない。抜け殻だよ、俺は。」
「確かに、確かに先生はもうこれ以上はないかもしれません。しかし他の者なら…」
　安士はその言葉に少し圧を強めて言う。
「弟子を作る気はねぇ。何度言ったらわかんだ、誰もついてこれねぇよ俺の修行には」
「ですが、貴族なら高級カプセルで体は頑丈なはずです。別に今回の件で弟子を、と言っている訳ではありません。先生が気にいる者がいる筈です。」
「はぁ、何で詐欺師やら香具師やら言われ放題の俺にそんな構うかねぇ、いつもお前の弟子とかめっちゃ睨んでくるんだけど」
「それは先生が手加減しないからでしょう。一般人や私の弟子達には理解できませんよ。」
　安士は小遣い欲しさに、偶に大通りなどで、己の剣の腕を披露するのだが…
　ある一定の実力者でなければ理解できないような、側から見ればまるで”大道芸”や”手品”にしか見えないような事をやっていた。

そもそも、その”一定の実力者”が非常に少ないのだが。
「剣に対しては誠実にって決めてんだ俺は。手加減なんてできねぇよ」
男はその答えに肩をガックリ落としながら
「なぜその真面目さを普段の生活に活かせないのか…」
（そもそも、剣に誠実なら小遣い稼ぎに使うのはアウトなのでは…？）
安士がそれに対し、「褒めるなよ」とか言いながら鼻を擦ってるのを無視して男は改めて安士を真っ直ぐに見つめた。
「な、なんだよ…」
「先生、私は貴方ほどの方が腐っていくのを見ているのが悔しいのです。どうかこの依頼での”出会い”が貴方の何かを変えてくれる事を祈っています。」
「お、おう、何だよ気持ち悪りぃ」
安士は少し恥ずかしくなり茶化すが、男はなおも真っ直ぐ見つめてくる。
安士はその眼差しに根負けしたのか。
「わかったわかった、まあ真面目に取り組むよ。」
男はその答えに安堵した…が
「ま、その坊ちゃんを気に入ったらな。だが、もし…その坊ちゃんが典型的な”お貴族様”なら…」

「な、なら…？」
男は喉をゴクリと動かす
「潰すわ」
男は頭を抱えた

一閃流

「うわ予想以上にガキだなぁ。ま、よろしく頼むわ」

それが、オッサン――安土が俺を見た第一声であった。

◇

なんだこの無礼なオッサンは、死刑にしてやろうか――とは思ったが、ブライアンと天城が俺以上に怒っていたので、ひとまずは許してやることにした。他の人が怒っていたらこっちの怒りって落ち着くよな

それに俺を強くしてくれるかもしれない男だ。

多少は水に流してやろう。

今は奇抜な屋敷の庭先で、オッサン――安土師匠は俺の前で胡座をかいている。無礼だなこいつ。

無精髭を生やし、ヨレヨレの着物姿。

まるで浪人だが…マジで浪人だろこれ。

浪人風の姿、死んだ魚のような目、軟派な雰囲気、覇気のなさ。

一応、腰に刀と”木刀”を差してるようだが…どこからどうみても強そうには見えない。
これが本当に、本物の武芸を身につけた男なのだろうか？怪しい。
だが――権力者を前にしてもこの余裕、己の強さに自信がある本物か――それともただの馬鹿か。
「おい、坊ちゃん」
は？坊ちゃん？俺のことか？しかも「おい」だと？まだ子供とはいえ、俺は伯爵だぞ？舐めてるのか？
「”リアム様”です。お間違いなきよう。」
俺が言葉を発するより先に天城が安土師匠――もうオッサンでいいや――を注意した。
オッサンは頭を掻きながら
「わかったわかった、そう怒るなよ。可愛い顔が台無しだぜ？」
なんだコイツ、天城を口説いてるのか？殺すぞ
「さっさっと俺に剣を教えろ。殺すぞ」
コイツ、本当に強いのか？ただのダメなオッサンにしか見えない
「まあ、急かすなや。んじゃ、ちょっと質問いいか？」

「何だ、早くしろ」
例え馬鹿でも貴族を前にここまで堂々とはできないだろう、コイツ実は大物なのか？
――ッッ！
圧を感じた――プレッシャーとも言うのだろうか。
目の前のオッサンは気配から何まで先ほどまでとは全く違って見えた。
「”リアム・セラ・バンフィールド”お前はなぜ――剣を望む？お前は貴族だ、確かに嗜む程度には必要だろうが――その様子じゃ、そうじゃないんだろ？」
呼吸ができない。歯がチカチカする。意識が飛びそうだ。
何だ？目の前の男は誰だ？本当にさっきまでと同一人物か？オーラが違う。
意識が朦朧としてきた時――天城が俺を守るように前に立っていることに気づいた――。
「天城、どけ」
天城は驚いた様子で振り返ってきた。
「旦那様――しかし」
「どけと言った」
「…はい」
天城が後ろに下がった事によりオッサン――安土師匠の顔が見えるようになった。

安士師匠は今のやり取りを興味深そうに見ていた。
「俺は――！」
俺は――！
「俺は力が欲しいッッ！奪われないための力がッ！圧倒的な力がッ！」
そして今度は俺が奪う側になるためにッッ！
安士師匠は――俺をジッと見ていた。
１０秒か？１分か？それとも何十分か？
時間の感覚もわからないほどの圧の中で安士師匠は笑いながら答えた。
「合格だ。気に入ったぞ――リアム」
それと同時に先程まであった圧が四散した。
「はぁっはぁっはぁっはぁっ」
俺は重圧から解放されたことにより、地面に手をついて必死に空気を求めて呼吸していた。いつのまにか大量の汗もかいていたみたいだ。
「旦那様！」
天城がすぐに駆け寄ってきて、俺を抱き起こしてきた。
み、みず…
「よく耐えた。まあ、まずは休憩だな。水分補給もしっかりな」

その安士師匠の言葉に天城は、いつもの無表情に怒りを乗せて
「この後の旦那様の指示次第では即効牢屋行きも覚悟しておいてください。」
「おお怖い怖い、まあ俺は休憩の間にまずは実演用の木でも用意しときますかね」
俺は天城に屋敷の中に連れていかれながら思った
――このオッサン、本物だ――

◇

2時間ほど休憩――とはいってもブライアンが運ばれてきた俺をみて「リアムさまぁぁぁぁぁぁ」と泣いたり医者に見せようとしたり、天城が「あの男は即効死刑にしましょう」とを言うのを何とか説得したり、体は休めたがなんだか気疲れしてしまった。
今は先もどの庭に天城とブライアン――『あの無礼な男からリアム様を何としてでも守りますぞ!』と言ってついてきた――を伴って戻ってきたところだった。
安士師匠は庭に丸太を適当に並べており、今は暇そうに丸太に座っていた。
「やっと戻ってきたか、なげーよ」
安士師匠はさっきのことは何事も無かったかのような態度だった
「安士殿!・このブライアン、堪忍袋の緒が切れましたぞ!・」

「なんだよジイさん、何も無かっただろ？死んでもねーし怪我もさせてねーし」（まあ、この先の修行ではするかもだけど）
「なんですと！そのような問題ではございません！」
　天城が静かだなと思い、様子を見れば睨みつけるように師匠を見ていた
「やめろ、ブライアン」
「しかし、リアム様」
「やめろと言った」
　ブライアンがションボリしてしまった。お前のそんな姿を見ても誰も喜ばないぞ
　そんなことより――
「安士師匠、先程は不甲斐ない姿を見せて申し訳ない。改めて俺に貴方の剣を教えて貰えないだろうか」
「リアム様？！」
　ブライアンが叫んでるが、無視だ
　この人は本物だ、多少性格に問題があろうが、そんなことは関係ない
　――俺には力が必要だ
「いいぞ、てか、そのために来たんだけどな」
　安士師匠は立ち上がり俺たちに近づいてきた

ブライアンと天城は警戒しているようだが、何も問題はない
この人がその気なら俺たちはもうこの世にいないだろう。
「修行を始める前に、まずはどんな剣を習うのか見せておこうと思ってな」
と言い、十数本とある丸太を見せてきた
これを全部切っていくのだろうか
「チェックさせてもらいます」
と天城は言い、何らかの端末を取り出した
「天城、それは?」
「これで詐欺行為に使用される道具を感知します。よろしいですね?」
魔法的な何かで感知できるのだろうか
師匠は笑って
「おう、いいぞ」
と答えた
「このブライアンも怪しいところがないかチェックいたしますぞ!」
と、丸太を調べ始めた。お前は大人しくしていろブライアン

「どこにも怪しいところがありませんね…」

ブライアンは何も見つけられなかったらしい、当たり前だ
「しかし、安士殿は刀ともう一本、木刀があるのですな…むむ！もしやそれに何か仕掛けがあるのでは⁉」
「おいおい、疑いすぎだろ、そうだなせっかくだしこれを使うか。ほらよ思う存分調べな」
ブライアンは木刀を調べ始めた、早くしろ
「この木刀を使うのですか？うーむ、ですが本当にただの木刀ですな」
安士師匠はブライアンから木刀を受け取りながら答える
「そうだな、めっちゃ頑丈なだけのただの木刀だ。超一流の剣士は獲物を選ばないからな、これテストにでるぞ」
天城もブライアンもすごく胡散臭い物を見る目で師匠を見ている
「よし、ちゃーんと見ておけよリアム」
「はい」
やっと安士師匠の実力が見られる。つい2時間前の出来事からその実力は本物だとはわかるが、剣士としての実力は、まだわからない
しかし、ただの木刀で本当に丸太を切れるのだろうか
師匠は木刀を手に持ったまま自然体だ

丸太一本ずつをその技量で叩き切っていくのだろうか
瞬間――場の気配が変わる
ブライアンも、機械である天城も気付いたのだろう
緊張感のある目で安士師匠を見ている
これが達人の気迫というものなのだろうか
そして――
「一閃」
師匠は一言呟いただけでこちらを振り返ってきた
先程の気配も消えている。
何だ？何かしたのか？
「どうだった？どうだった？俺を讃えよ」
「安士殿、何かしたようには見えませんでしたが？」
ブライアンが呆れたように言う、その通りだ、何の変化も起こってない
そして、俺は天城が静かだと思い目を向けてみたら
――驚いた、天城が目に見えてわかるほどに表情を変えていたのだ
目をまん丸にして、天城がいう
「全て――斬られています」

「え？」
「丸太が全て斬られています」
瞬間、全ての丸太が縦に割れていく――いや、天城の言う通り、斬ったのだろう
丸太の断面図は綺麗で、丸太ごとに全て違う太刀筋で斬られている。
木刀の届く距離ではないし、そもそも木刀が動いたのが見えなかった。
「端末は…何の反応もありません」
「何ですと!?盆栽が趣味のこのブライアンが全てチェックしたのですぞ!?」
天城とブライアンが言う。ということはこれは何もタネも仕掛けもないという事だ。
あと盆栽が趣味は関係ないと思うぞブライアン。
「まあ、上手く斬れすぎて時間差っぽくなるのが欠点だな」
安士師匠がことも何気に言う。すごい！すごいなファンタジー世界！
こんなに凄い技があるなんて思いもしなかった！
これを極めれば俺は強くなれる！
あ、それはそうと
「師匠、これは一体、何という流派なのですか？」
師匠は少し――ためらいがちに答えてくれた
「一閃流――この世で最も愚かな流派さ」